2021年
1月-12月

海外在住者向け
無料メール発達相談
～教育的ニーズのある子どもを帯同する邦人家族の支援～

クリスタル・チルドレン

もくじ

1. まえがき
2. 無料電話相談
3. 帯同児
4. パンデミック以降の邦人家族①
5. パンデミック以降の邦人家族②
6. 相談方法と頻度の変化
7. 夏季オンライン勉強会①
8. 夏季オンライン勉強会②
9. 秋季オンライン勉強会
10. パンデミック禍で困ったこと
11. 考察
12. むすび

1．まえがき

- クリスタル・チルドレンでは、海外在住で、発達に気がかりな点がある子どもを育てる邦人家族を対象として、2018年10月より無料のメール発達相談を開始した。
- 2020年に始まったコロナのパンデミックは、慣れない海外生活での育児や療育に奮闘していた保護者へ、大きな負担となってのしかかった。園や学校・療育施設が閉鎖され、長期化する厳しい外出規制からの深刻なストレスが、当支援に寄せられた相談で伺えた。
- クリスタル・チルドレンの無料発達相談の目的は、海外という特殊な環境で、発達に特徴のある子どもを育てる邦人家族の生活の支援を行うことである。

2．無料電話相談

- 現在、4年目となる当無料発達相談には、アジア、ヨーロッパ、アフリカ、中東、北米、南米、などの地域に滞在する135組の家族から、延べ472回にのぼるメールや電話での相談があった。（2022年1月末現在）
- 2021年1月から12月の1年間で、タイ、アメリカ、ドイツ、インド、ベトナム、スペイン、シンガポール、モザンビーク、ブラジル、中東に在住する、57組の家族から、延べ129件の問い合わせがあった。
- 海外赴任決定後に、子どもの進学先が見つけられず、帯同を断念した家族や、現地で幼稚園から小学校に進級する際、同様に進学先を見つけられずに、母子のみ日本へ帰国する選択を迫られた家族からの相談があった。

入学申し込みをしたが、面接やテストで断られた場合の理由：

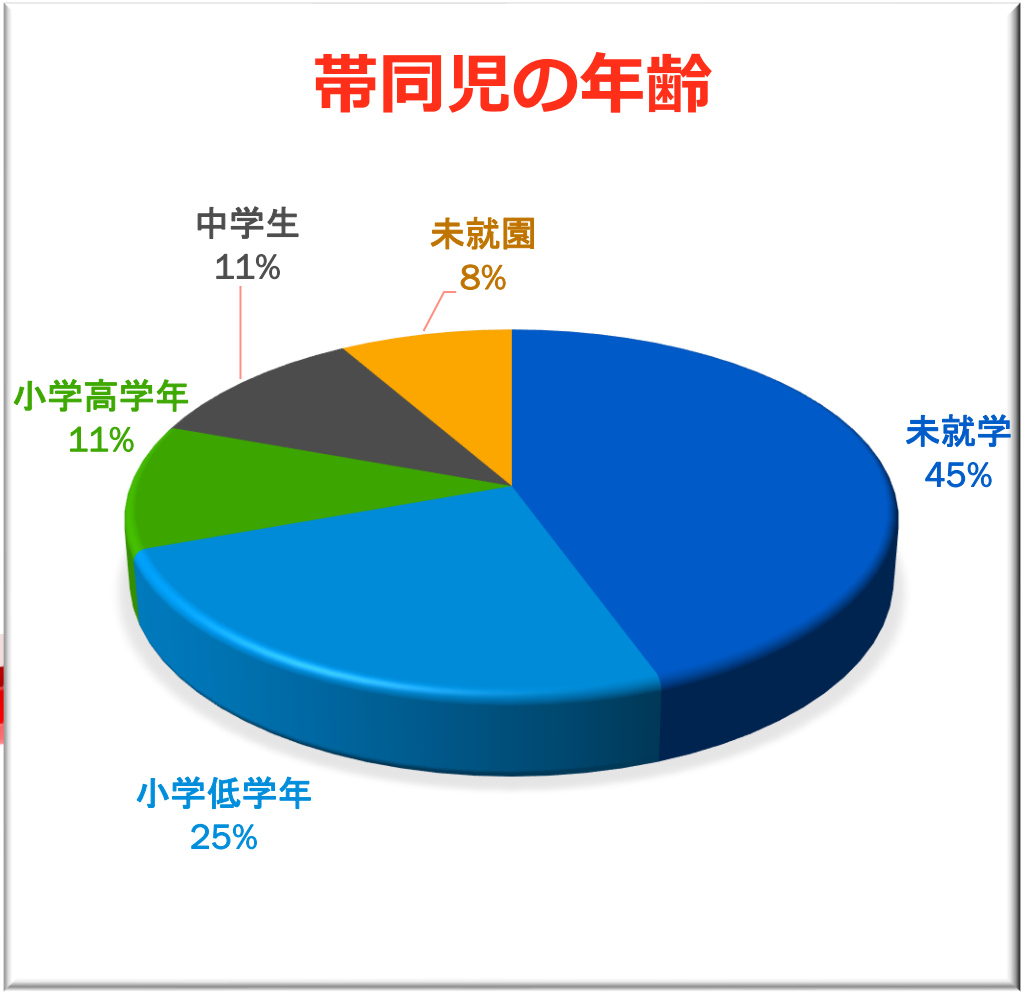
- オンラインではサポート体制がない
- 障がいの程度

入学後のトライアル期間中に断られた場合の理由：

- オンラインでは、提出物や課題がこなせない
- オンライン授業に参加したがらない

3．帯同児

帯同児は、未就学の男児が最も多く、未就学児や未就園児を複数育てている相談者は、全体の42.9%と、最多であった。



- 複数の幼い我が子を、限られた屋内で長期間生活させることから生じる保護者のストレスが、限界に達している様子が伺えた。
- 上の子どものオンライン授業のサポートをしている最中、下の子どもがベビーベッドから誤って転落しケガをして入院してしまったケースがあり、そのことが原因で軽い鬱状態になった相談者がいた。
- 相談者の中には、現地で初めての出産を経験し、産後の入院中にロックダウンを体験した者もいた。同じく出産後、予定していた実家からの手伝いが得られず、現地のシッターも雇えず、厳しい外出規制の元、一切援助なしで長期間の孤独な育児を余儀なくされた相談者がいた。

4．パンデミック以降の邦人家族①

現地でコロナ拡大が深刻化しても、帰国の選択をしなかった邦人家族が、その後どのように1年間を過ごし、どのように帰国を決意したか、その実態が相談結果から明らかとなった。（下図参照）

現地に留まる
- 多くの家族を見送る

→

孤独に感じる
- 取り残された感覚を味わう

→

自粛生活
- 厳しい外出規制を体験

→

感染者増加
- 家族や知り合いが次々に感染

↓

医療崩壊
- 現地の病院が頼れなくなる

←

入院不可
- 自宅療養を余儀なくされる

←

園・学校閉鎖
- 長期に渡る外出規制

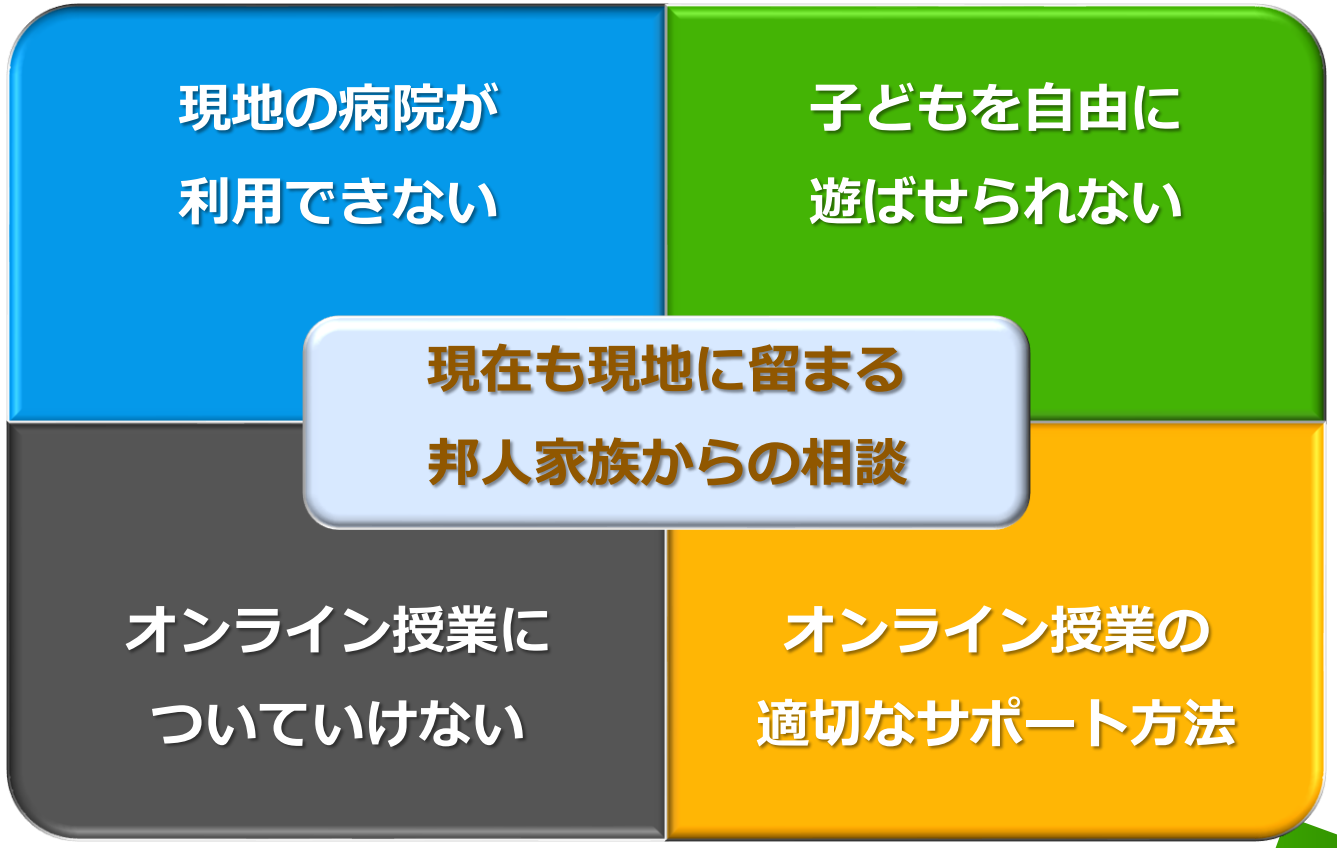
←

母子のみ帰国
- 医療・療育・教育を求めて本帰国

5．パンデミック以降の邦人家族②

今もなお、現地に留まる選択をしている相談者家族は、①家族一緒に暮らしたいこと、②子どもがパパっ子であること、③以前に体験した単身赴任で、父親不在の子育てが非常に辛かったこと、などを理由としてあげていた。

- ❖学齢期以上の子どもから、「死にたい」、「殺したい」などの過激な言葉が出始め、我が子の自傷・他傷行為を目の当たりにした保護者から、急を要する深刻な相談があった。
- ❖以前見られたような、我が子の心の健康を取り戻したいと、親子共々心身共に追いつめられて、問い合わせをする相談者が増加した。



6．相談方法と頻度の変化

- パンデミック以前と比べると、時間短縮が可能な電話相談よりも、メールでのやり取りを希望する相談者の数が増加した。理由として、子どもが常時いるため相談の時間がとれないことの他に、相談はしたいが他者と話をするほど、自身の元気がないことをあげた相談者が多かった。
- 初回に「子どもの進路」に関する問い合わせをした相談者は、その半年から1年後に、再び別の相談をする傾向が見られた。2回目の相談内容は、主に3つに分けられた。（右図参照）
- 子の持つ発達の特徴が軽度の場合、子の進学先に発達の特徴を申し伝えず入学希望や手続きをしているケースが多かった。入学後、オンライン授業についていけず、子がストレスによる二次障がいを発生させ、相談者が2度目の相談を問い合わせる傾向がみてとれた。

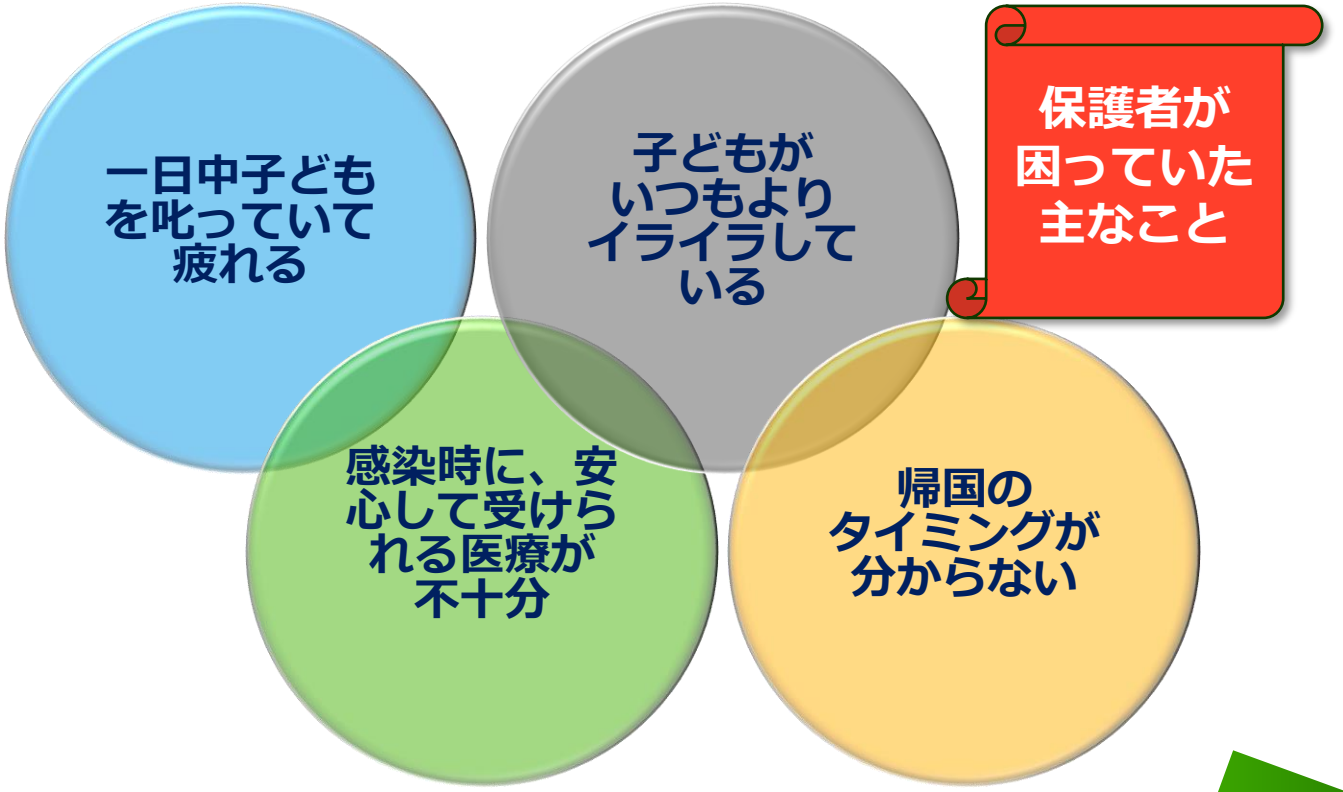
2回目の相談内容

1. 不登校
   - 進学先で馴染めない
   - オンライン授業が困難
2. 子育て
   - ストレスによる子の問題行動
   - 問題行動による近所との不和
3. 医療
   - 発達検査
   - 与薬

7．夏季オンライン ウィークリー勉強会①

2020年に行った相談による支援ニーズから、2021年の夏と秋に、「オンライン授業のサポートの仕方」、「子どもとの適度な距離の取り方」、などに関する無料のオンライン勉強会を行った。

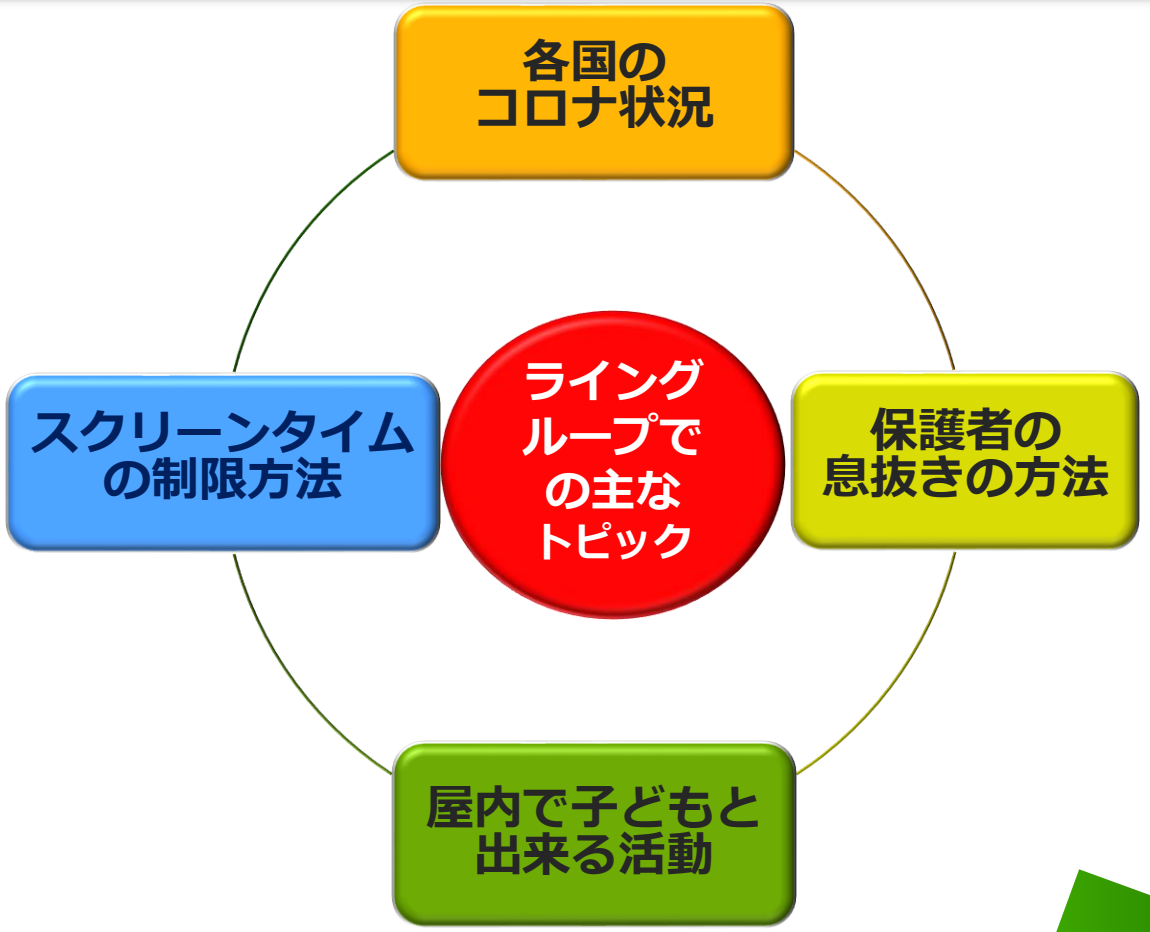
- 夏季オンライン勉強会は、発達に特徴のある子どもを育てる保護者を対象に、①タイの親の会の会員向けのウィークリー勉強会（全2回シリーズ・各1時間）と、②会員以外で海外在住の保護者を対象としたウィークリー勉強会（全5回シリーズ・各1時間）に分けて開催した。
- ①の勉強会の参加者は、全員顔出し有りで、勉強会後に懇談を設けて自己紹介をした。それぞれの子どもの発達の特徴や、現在困っていること、上手くいったことなどを話し合った。



8．夏季オンライン ウィークリー勉強会②

この勉強会の参加者は、タイが最多で、次いでアメリカ、中国、ドイツ、スペイン、シンガポール、イギリス、フランス、ミャンマー、マレーシア、メキシコ、等の地域に在住の、保護者や教育・療育関係者、計53名であった。

- 参加者が帯同した子どもの数は、2人（52%）が最多。次いで、１人（46%）、3人以上（2%）であり、男児の数は女児の2倍以上であった。
- このオンライン勉強会では、顔出しを無しとした。参加者が、同じ境遇の保護者仲間を切望していたことから、出会いの場となるラインのグループをいくつか作成した。グループ参加希望者を相談員が招待し、相談員の監修の元、各グループで自由に親交を深めてもらった。グループのメンバーは毎週変わり、情報交換の場としても利用してもらえ、大変好評であった。



9．秋季オンライン勉強会

- 夏季オンライン勉強会②に参加していた相談者で、現地の日本人会でも、会員を対象とした同様の内容の勉強会をしてほしいとの要望があった。
- この無料の勉強会（全2回シリーズ、各1時間）では、発達の特徴の有無に拘わりなく、子育てをしている保護者であれば誰でも参加できることとした。
- 勉強会後のアンケートから、標準的な発達をしている子どもを育てる保護者でも、非常に切羽づまった状況で育児をしている様子が伺えた。

海外育児で保護者が困っていること

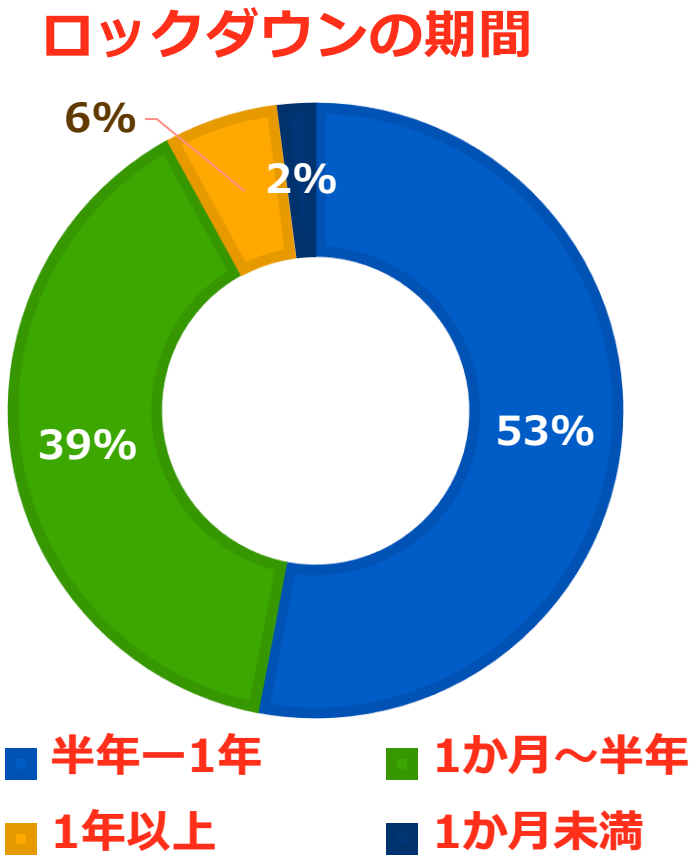
祖父母との時間が少ない	日本の学校に順応できるか心配	子育てセンター、定期健診がない
外出・外遊びが一切出来ない	日本の文化や遊びを知らない	一切の習い事が長期閉鎖
一度も登校登園出来ていない	お友だちと全く会えない	日本人学校職員の引継ぎ不充分

10. パンデミック禍で困ったこと

2020年から始まったパンデミックにより、相談者の全員が、ロックダウンを経験していた。更に、その殆どの帯同児が半年以上の長期的な園や学校の閉鎖を伴う厳しい外出規制を、複数回体験していた。（下図参照）

- 相談者家族の中には、新一年生として進学したが、その年は丸1年、一度も学校に通えずに自宅のオンラインで過ごした子どももいた。入学式も終了式もオンラインで、友達と一度も会えずに終わってしまった子どもが、学校に通いたいと言い始めたことをきっかけに、その後、その家族は母子のみ本帰国をした。

- パンデミック禍に、子どもが通う学校の担任から発達検査を求められ、一時帰国をした相談者がいた。コロナが猛威を振るっていた時期だったので、混乱した空港での手続きなど10時間以上かかり、到着後のホテルでの長い隔離生活など、幼い子どもを複数抱え、とても辛い体験をした相談者家族がいた。



11. 考察

ネットワークづくり

秋季勉強会で、ラインを利用し、世界中に点在している邦人家族をつなぎ、出会いの場を提供した。この交流は、孤独に感じていた保護者にとって、ピアカウンセリングとしての機能を果たしたことが、グループ内の会話から伺えた。

保護者支援

長く厳しい外出規制から、「何か月も、家族以外の人と会ってない」、「子どもの社会性が心配」、「ストレスから、子どものチックが始まった」、「自分の時間が全く持てず、疲れる」など、発達の特徴がない子どもを育てている保護者でも、似通った悩みを抱えていることが、勉強会のアンケートから明らかになった。

オンライン授業のサポート

軽度の発達特徴を持つ子どもでも、対面式であれば少しのサポートで、通常級の授業についていけていた。
しかし、オンライン授業では「少しのサポート」が皆無になる。子にストレスがかかったところに、見かねた保護者が声をかけると、親子の仲が悪化し、家庭の雰囲気が悪くなるという悪循環を生みだしていた。

12. 結び

- パンデミックが始まり、海外在住の邦人家族の多くが本帰国をする中で、現地に留まる決意をした家族は、取り残されてしまった疎外感を体験していた。更に、滞在する国は異なっていても、同じ内容の悩みを抱えていることが、勉強会のグループワークから明らかとなった。このことから、海外在住の家族が気軽に利用できるネットワークの充実が、今後の支援の課題であると言える。
- 海外の学校や園では、オンライン授業が主体となっていたため、ごく僅かな発達の特徴を持つ子どもたちにとって、学習が困難となった。課題の提出や期限を守ることが出来ず、自己肯定感が低くなり、深刻な二次障がいを引き起こす原因となっていた。このことから、特に軽度の発達障がいを抱える子どものオンライン学習を支援する包括的なシステムを、早急に考える必要がある。
- 2021年に行った、標準発達を示す子どもを育てる保護者を対象とした勉強会のアンケートから、パンデミック禍に海外で生活を続けることは、非常に困難であることが明らかとなった。多くの保護者が、苛酷な条件の元、孤立無援の状態で孤独に子育てをしている様子が伺えた。今後は、標準発達を示す子どもを育てる海外在住の保護者へも、継続した支援が必要であると言える。

無料メール発達相談
クリスタル・チルドレン
https://1437277.site123.me/

発達相談員：佐々木恭子
crystalchildrenhelp@gmail.com